

## ○研究あれこれ

## 被差別部落民衆の真宗信仰をめぐる覚書

奥本武裕

被差別部落の寺院の多くが、西国を中心に浄土真宗寺院であり、篤信の門徒が多いことは早くから注目を集めてきた。江戸幕府によって真宗が被差別部落に強制されたとする考えは、研究史的に見てもすでに否定されていると言ってよいが、それでは「なぜ」真宗なのかという点については、どの様な説明がなされているのだろうか。

来世での平等な浄土往生を説く真宗が、厳しい差別にあえぐ被差別部落民衆にとっての「救い」となると説明されることが一般的に多い。例えば、松浦静山『甲子夜話』に以下の記述がある。

この十一月十五日、京本願寺自火にて焼亡す。

近頃かの地より来りし人の話を聞に、本堂に火移りしとき、宗旨の穢多ども二百余馳集りて消防せしが、火勢盛んにして防留がたく、其辺往来も協がたく成ると、半の人数は門外へ逃れたりしに、残る百人計は本堂とともに灰燼と成て失ける。その後生残りし穢多、又その間に合ざりし者等打こぞりて後悔し、本堂とともに焼死せし者は真に成仏して来世に穢多を離れて平人に生れ出べしと皆羨しとなり。

文政6(1823)年11月15日、京都の東本願寺が火事にあつた。京都から来た人の話によると、近隣の被差別部落の門徒200人余りが消防にあたつたが、そのうち100人ほどは本堂とともに焼け死んだ。生き残った者たちは、「本堂とともに焼死した者は成仏して、きっと来世で「平人」に生まれるはずだ」と羨ましがり、後悔したというのである。

ここから導き出されるのは、「厳しい差別からの救い」を一心に真宗に託し、その本山である本願寺の危機に、命をも投げ出す信仰のありようであろう。

しかし、はたしてそれをそのまま近世の一般的な被差別部落民衆の真宗信仰の姿とすることができるのであろうか。著者は伝聞によりこの事を記しているのであるし、本願寺近郊の被差別部落であるという事情も考慮しなければならないであろう。

また、そのような被差別部落民衆の心情を、そのまま真宗受容期と考えられる中世後期～戦国期にまで遡及させて理解することが妥当であるか否かも検討される必要があろう。

例えば、西本願寺と大和国内の末寺の往復書簡集である『大和国諸記』の享和2(1802)年の項に、

本願寺御影堂修復のための材木運搬の役務を、平群郡にある被差別部落の門徒たちが、「御安心惑乱之筋」を理由に拒絶したことを記す記事がある。

当時、西本願寺教団は、本願寺史上最大の異義事件である三業惑乱により、教団を二分するような紛争の渦中にあつた。そのことを理由に、本山からの役務を拒否しようとする被差別部落民衆の姿は、先の『甲子夜話』に描かれるものとは、明らかに異質な相を示しているのではないかと。

「厳しい差別からの救い」を議論の前提として設定してしまうかぎり、「なぜ真宗なのか」という問いには先験的に答えが与えられてしまっていると言わざるを得ないし、『大和国諸記』に見られるような被差別部落民衆の行動は理解不可能となるのではないだろうか。

(史資料調査委員会調査研究員)